

思いとかたち

柴崎 友香

しばさき ともか / 1973年大阪生まれ。小説家。2000年『きょうのできごと』(河出書房新社)でデビュー。2007年『その街の今は』(新潮社)で第57回芸術選奨文部科学大臣新人賞、第23回織田作之助賞受賞。著書に『青空感傷ツアー』『また会う日まで』(河出書房新社)『主題歌』(講談社)など多数。

大阪で暮らす若い女性がむかしの写真を集めて自分が住む街の過去を実感しようとする気持ちを『その街の今は』という小説に書いた。古い写真を使った絵はがきや戦後に写された空中写真などが小説のなかに出てくるが、それらの写真の大半は、大学で卒業論文を書くときに集めた資料がもたっている。

わたしは大学で人文地理学を専攻していた。そう言っと、小説と関係ないのにどつして、意外ですね、なんて言われることが多いが、自分のなかではふたつのことはそんなに違わないというか、関心のありようという点では同じだ。卒業論文のテーマは「都市のイメージを写真によって分析する」ことで、『その街の今は』はその小説版だ、と自分では思っている。地理学だと階段を積み上げて着実にひとつひとつ上っていく感じ、小説ではときどきその段階を飛び越えるようなやり方ができるとい

うふうに、あらわし方を変えてなんとか伝えようとしているのだと思う。

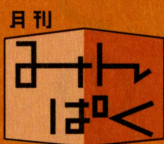
それからわたしの小説はいわゆる「大事件」が起これなくて日常のできごとを題材にしていることが多い。それで、日常にこそドラマがあるんですね、と感想をいただくこともあるのだけれど、それも少し違う。電車で向かいに座る人を見ていると窓から外

に広がる風景を見ていても、おもしろくてまったく飽きないのだが、その「おもしろい」というのは、特別変わったことを発見しているわけではない。

たとえるなら、昆虫や動物を見て「こつちのは羽根が長いけど、こつちには羽根が短いのがいる！」というような驚きに近いのではないかと思う。良いとか悪いとかではなく、違う、同じ、似てる、それだけでじゆうぶん驚異的だし、そこから考えることはいくらでもあつて、好奇心は加速していく。

そういう性質なので当然、「みんなばく」は、寝袋を持ち込んで暮らしてもいいと思うほど好きな場所だ。最初に行つたのは何歳のときだったか覚えていないけれど、何度行つても、目が覚めるみたいに驚く。わたしにとつてはテーマパークのアトラクションよりずっとわくわくするし、同時に、自分の家に帰ってきたように心が安らぐ。

それはきつと、みんなばくにあるものが、みんな人が作つたものだからだと思う。ひとつひとつ、誰か、それはわたしが会うことのない知らない人だけれど、その人の思考がその人の手によってかたちになってあらわれているからだろう。いつか、わたしが感じているこういう気持ちを小説のかたちにしたいと、長いあいだ考えている。



目次

AUGUST 2008
月刊みんなばく

8

01 エッセイ 世界へ世界から
思いとかたち
柴崎 友香

02 みんなばくインタビュー
景観をめぐる
ふたつのフィールド
金田 章裕

08 モノ・グラフィ
ムシロやゴザを織る道具
吉本 忍

10 地球ミュージアム紀行
砂漠のなかの
グローバル楽器博物館
寺田 吉孝

11 表紙モノ語り
北西海岸のシルクスクリーン版画
岸上 伸啓

12 みんなばくインフォメーション

14 万国津々浦々
お犬様とEU加盟
新免 光比呂

15 時論・新論・理想論
ラテンアメリカの古写真を求めて
齋藤 晃

16 外国人として生きる
インドとのつながりを胸に
窪田 暁

18 歳時世相篇
⑤キャンプ
イヌイットの夏の生活
岸上 伸啓

20 生きもの博物館の
博物館の
いたずら虫たち②
和高 智美

22 フィールドで考える
「水上人」の幻影
長沼 さやか

24 みんなばく ウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

※表紙解説は11ページ